

### 一番茶新葉内成分の経時的変化の品種間差

根角厚司・和田光正・武田善行 (野菜・茶業試験場久米支場)

Atsushi NESUMI, Kosei WADA and Yoshiyuki TAKEDA : Varietal Differences of Changes in Chemical Components of Green Tea Leaf During the 1st Crop Time

著者らは、これまでに全窒素とタンニンの比率 (全窒素/タンニン) は品質との相関が比較的高く、交雑後代におけるそれらの茶葉内成分含有量は交配親の特徴をよく反映していることを認め、一番茶新葉内の化学成分含有量によってある程度のスクリーニングが可能であることを明らかにした。この場合、同一条件 (摘採適期) の芽を採取することが重要であるが、新葉内の成分含有量は変動が大きく、また品種によって新芽の伸びる速度や出開く速さが異なっているため、多数の個体の摘採適期を正確に判定することは困難である。また、摘採適期の長さも品種によって異なることが経験的に言われている。そこで、代表的な品種について一番茶新葉内のタンニン、全窒素及びカフェインの含有量の経時的変化を比較し、品種の特徴を明らかにした。

#### 1. 試験方法

供試品種は摘採適期が比較的短い早生の「ゆたかみどり」、摘採期が遅れると品質の低下が著しい晩生の「おくゆたか」、中生の「やぶきた」、早生の「あさつゆ」及び「やぶきた」と「あさつゆ」のF<sub>1</sub>である「さえみどり」を供試した。

分析に用いた材料は一番茶芽の2~3葉展開期から完全に出開くまでの期間について3~4日おきに1芯2葉ないし3葉で採取した。茶葉内成分の測定は近赤外分光分析計で行った。

#### 2. 結果及び考察

全窒素含量は、「あさつゆ」「ゆたかみどり」「やぶきた」では摘採適期前後から減少し始め、「さえみどり」は摘採適期をやや過ぎてから減少に転じた。また、「あさつゆ」とそのS<sub>1</sub>である「ゆたかみどり」の経時変化はよく類似した。「おくゆたか」は2~3葉開葉期の測定初期には6.7%を越える高い含有率であったが、生育ステージの進行と共に急激に減少した。

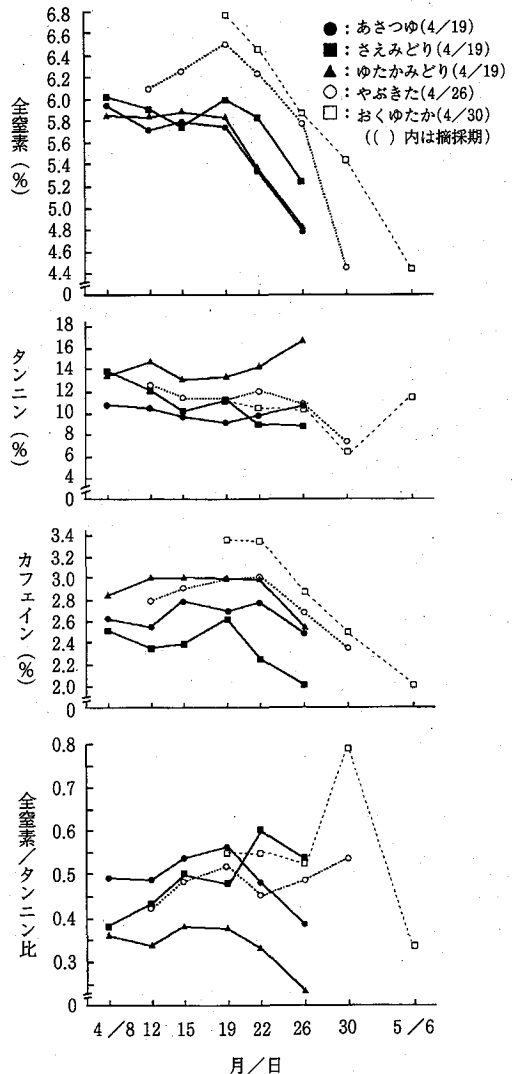
タンニン含量は、「あさつゆ」「さえみどり」「やぶきた」は新芽の生育と共に徐々に減少したが、「ゆたかみどり」はやや増加し、「おくゆたか」は摘採適期以降に増加した。

カフェイン含量は「あさつゆ」「さえみどり」「ゆたかみどり」そして「やぶきた」は摘採適期頃から徐々に減少したが、「おくゆたか」は摘採適期より1週間以上前から減少し始めた。

煎茶品質の指標の一つである全窒素とタンニンの含有比 (全窒素/タンニン) は、「さえみどり」と「やぶきた」は生育ステージの進行と共に全窒素の比率が高くなった

が、「ゆたかみどり」と「あさつゆ」は摘採適期以降全窒素の比率が低くなった。また、「おくゆたか」は摘採適期には全窒素の比率が非常に高かったが、摘採適期以降急減した。

以上の結果から、従来経験的にいわれてきた品種による摘採適期の長さの違いは、茶葉内成分の経時的変化によって説明できると考えられた。



第1図 一番茶新葉内成分の経時的変化